

《評論連載》

絵本論を探して

少年は大森林へ行く(第三回)

灰島 かり

少年は森へ行く

前回は、マージヨリー・フラック作の絵本『おかあさんのたんじょう日』^(注1)を例にとり、「少年が森へ行く」というひとつの基本構造がどう描かれているかを解説した。少年は日常とは異なる場所(＝森)へ出かけ、他者(＝クマ)と出会い、成長して帰宅する。この構造は、絵本に限らず児童文学のひとつの基本のパターンだろう。絵本の場合特にこの構造を把握することによって、それぞれの絵本のとりわけ絵の特徴が、より鮮明に浮かびあがる、というのが筆者の主張である。ではこの基本構造を、他の絵本で見ることしよう。今回は『大森林の少年』(キャスリン・ラスキー作、ケビン・ホークス絵、灰島かり訳、一九九九年、あすなろ書房)をとりあげ、次回はより人口に膾炙した絵本であるモリス・センダック作『かいじゅうたちのいるところ』と、マリー・ホール・エッツ作『もりのなか』を見ていきたい。

『大森林の少年』

『大森林の少年』(図1)は、拙訳の本であるし、誰もが知っているという絵本ではないので、躊躇するものが無いわけではないのだが、構造を見るにはびったりなので、ご容赦願いたい(ついでにとっても良い絵本なので、ぜひ手に取ってみてください。二〇〇〇年度の厚生労働省特選図書^(注2)の選定を受けたので、多くの図書館に入っています)。文章を書いたのは、ユダヤ系の作家であるキャスリン・ラスキー^(注3)で、自分の父親の実体験に基づいたものとのこと。これにケビン・ホークス^(注4)が優れた絵をよせている。リアリズムの絵本であり、実体験ならでのノンフィクションの味わいを持っている。主人公のマーベンは一〇歳であり、読者もそのあたりが想定されているために、絵本としては文章の量が多い。

あらすじを紹介すると、時は一九一八年で、場所はカナダの国境に接したアメリカのミネソタ州。スペイン風邪と